視覚障害者スキーの現状と課題－ブラインドスキーサミット 2015 の開催を通して－

Current Status and Issues of Skiing for Persons with Visually Impairments
– A Report from the Blind Skiing Summit 2015 –

矢部 健三
（神奈川県総合リハビリテーションセンター七沢自立支援ホーム）
串田 直樹
（かながわブラインドスキークラブ）

Kenzo YABE (Kanagawa-ken General Rehabilitation Center, Nanasawa Self-Reliance Support Homes)
Naoki KUSHIDA (Kanagawa Blind Ski Club)

要旨：
目的：視覚障害者スキーの現状と課題を明らかにする。方法：5 団体の参加を得て「ブラインドスキーサミット 2015」を開催、活動実績、誘導方法、晴眼スキーヤーの募集方法等の情報を交換。結果：2 団体が 1980 年代から活動を開始、他 3 団体も 2000 年前後から活動。誘導は、いずれの団体も後方からが中心、視覚障害者の希望によっては前方からも実施。4 団体が曲がる方向を指示、1 団体は、曲がるタイミングを「ターン」などの掛け声で指示。誘導用具は、3 団体でワイヤレス式インカム・ヘッドセットやハンズフリー拡声器を使用。全ての団体で視覚障害者であることを知らせるビブスを着用。晴眼スキーヤー募集は、過去の参加者や口コミが中心。2 団体では、社協を通じて地元スキーヤーの協力も得ていた。結論：各団体の共通の課題として、晴眼スキーヤーの不足や高年齢化が明らかになった。今後も情報交換を継続し視覚障害者のスキー環境の充実・発展に繋げていきたい。

キーワード： **視覚障害者スキー、スポーツ、レクリエーション**

1. 目的

視覚障害者がレクリエーション・スポーツをしたいと考えたとき、その選択肢や機会は限られ、視覚障害者のレクリエーション・スポーツ環境はまだ充実しているとはいいがたい。このような状況の中で、いくつかの団体で視覚障害者のアルペンスキーが行われてきた。

本稿では、かながわブラインドスキークラブの設立 30 周年記念事業として開催した同種の団体による情報交換会「ブラインドスキーサミット 2015」について報告し、視覚障害者スキーの現状と課題を明らかにする。

2. 方法

2.1 参加団体

「ブラインドスキーサミット 2015」に参加したのは以下の 5 団体である。

(1) かながわブラインドスキークラブ（神奈川、以下「KBSC」）
(2) シー・ハイル（東京、以下「SH」）
(3) だいすきークラブ（神奈川、以下「DSC」）
(4) TABS（Tokyo Association for Blind Skiers、東京）
(5) 三ツ星山の会（富山、以下「MY」）

図 1　ブラインドスキーサミット 2015 での集合写真

2.2 開催日時

2015 年 10 月 3 日（土）　13:00～17:00

2.3 開催場所

神奈川県ライトセンター
所在地：横浜市旭区二俣川１－８０－２

2.4 調査方法

事前に面接による聞き取りを行った他、調査票として発表用スライドのフォーマットを配布し、必要事項を記入してもらった。

当日は、それをもとに各団体 10 分程度でプレゼンテーションを行い、その後質疑応答を行った。

2.5 調査内容

各団体の沿革、組織運営、活動状況、スキー誘導法、晴眼スキーヤーの募集・育成法、課題等

3. 結果

3.1 各団体の沿革

3.1.1 KBSC の沿革：　神奈川県ライトセンターを拠点に活動するボランティア団体、神奈川県視覚障害援助赤十字奉仕団が 1980 年から毎年開催していた行事「ブラインドスキー」が母体である。その参加者が中心になり、1985 年に「神奈川県視覚障害スキー協会」を設立した。その後、2001 年に「かながわブラインドスキークラブ」に改称して現在に至っている。

3.1.2 SH の沿革：　1976 年から葛飾盲学校（当時）が実施していた「雪国教室」が母体である。卒業後もスキーを楽しむ機会を持つ目的で、同校卒業生が 1986 年に「シー・ハイル」を設立した。

3.1.3 DSC の沿革：　神奈川県スキー協議会が 1983 年から開催している「神奈川障害者交流スキー」が母体である。それに参

加していた視覚障害スキーヤーが中心になり 1999 年に「だいすきークラブ」を設立した。クラブ設立時には、KBSC の協力を得てブラインドスキーの誘導技術を導入した。

3.1.4 TABS の沿革：　東京都盲人福祉協会青年部が、KBSC の協力を得てブラインドスキーの誘導技術を導入し、1995 年から主催していたスキーツアーが母体である。その参加者が中心になり、2003 年に TABS を設立した。

3.1.5 MY の沿革：　富山県の障害者の登山活動を支援するボランティア団体として、1999 年に「三ツ星山の会」を設立した。2003 年に新潟あいゆー山の会及び高田盲学校の協力を得てブラインドスキーの技術講習を行い、翌 2004 年からツアーを開催している。

3.2 各団体の組織運営

表 1 に各団体の会員数等を示した。役員会を組織していた団体は 3 団体、会務とツアー運営を分けていたのは 2 団体であった。

表 1　各団体の会員数等

	KBSC	SH	DSC	TABS	MY
設立	1985	1986	1999	2003	1999
会員	97 名 B36S61	33 名 B27S6	18 名 B13S5	110 名 B40S70	150 名 B40S110
会費	¥2,000	－	¥6,000	－	¥2,000

※表中の「B」は視覚障害スキーヤー、「S」は晴眼スキーヤーを表す。会員数は、2015 年 4 月現在の概数。

3.3 各団体の活動状況

表 2 に各団体の活動状況を示した。

表 2　各団体の活動状況

	KBSC	SH	DSC	TABS	MY
ツアー	年 2 回	年 1 回	年 1 回	年 3 回	年 1 回
場所	1 月 岩原 2 月 尾瀬岩 鞍	3 月 戸隠	2 月 木曽福 島	1 月 浅間 2 月 妙高 3 月 裏磐梯	1 月 立山山 麓
会報	年 3 回		年 4 回		

シーズン中のツアー開催回数は、TABS の 3 回が最も多く、KBSC の 2 回がそれに続いた。他の 3 団体はいずれも 1 回の開催だった。ただし、SH はアルペンの他にクロスカントリーのツアーを 1 回開催している。各団体とも、会員相互の交流や体力維持などを目的に、懇親会や研修会、レクリエーションなども開催していた。会報を定期的に発行しているのは、2 団体だった。SH では、1991 年暮れフランス・ティーニュでスキー交流を、1997 年 1 月、スイス・サンモリッツ盲人スキー学校で研修も行っていた。

3.4 各団体のスキー誘導法

表 3 に各団体のスキー誘導法等を示した。

誘導ペアは、原則視覚障害スキーヤー1 対晴眼スキーヤー1 とするのが 2 団体、晴眼スキーヤーの参加数や視覚障害スキーヤーの見え方、スキー技能によって 1 対 1 もしくは 1 対 2 とするのが 2 団体、原則 1 対 2 とするのが 1 団体だった。滑走前にはどの団体も、コースの状況（斜度、コース幅、コース両側の状態、雪質、混み具合など）を晴眼スキーヤーから視覚障害スキーヤー

に説明していた。

表３　各団体のスキー誘導法等

	KBSC	SH	DSC	TABS	MY
ペア	B1S1～2	B1S1	B1S1	B1S2	B1S1～2
誘導	後前 前前	後前 前前	後前	後前 前前 前後	後前 前前
指示	方向等	方向等	方向等	タイミング等	方向等
用具	WIHS HFS ビブス ヘルメット	ビブス	WIHS HFS ビブス	HFS 鈴 ビブス ヘルメット	ビブス

※表中の「後前」は後方前向き誘導法、「前前」は前方前向き誘導法、「前後」は前方後向き誘導法、「WIHS」はワイヤレス式インカム・ヘッドセット、「HFS」はハンズフリー拡声器を表す。

スキー誘導法は、今回調査対象とした 5 団体では、4 団体が後方前向き誘導法 1)を中心にしていたが、TABS では視覚障害スキーヤーの前後を晴眼スキーヤーが滑り、視覚障害スキーヤーの希望で前方前向き誘導法 2)や前方後向き誘導法 3)、後方前向き誘導法を自由に選ばせていた。その他の団体でも、視覚障害スキーヤーの保有視力によって、前方前向き誘導法を使用する者がいるとのことだった。指示内容は 4 団体が曲がる方向だったのに対し、TABS は、とっさの指示の際に視覚障害スキーヤー・晴眼スキーヤー友に左右を間違えてしまうことが多いとの理由で、曲がるタイミングを「ターン」などの掛け声で知らせていた。

誘導に使用する用具としては、3 団体で WIHS や HFS を使用していた。これらの機器を現在使用していない 2 団体も、機器使用を試行した経験はあるが、滑走中の風切り音やハウリングで十分な効果を得られなかったとの報告がなされた。これに対し、現在機器使用中の団体からは、風切り音やハウリングの防止方法として、ウインドスクリーン（スポンジ製のマイクカバー）を装着する、咽頭マイクを使用する、電池残量が少なくなるとハウリングを起こしやすいので使用時以外はこまめに電源を切るなどの助言がなされた。また、HFS の使用は、周囲への注意喚起にも役立つとの指摘が複数なされ、推奨機種として、TOA（株）の VOICE WALKER ER-1000 や(有)南豆無線電機のパワギガＳ NZ-671-B などが紹介された。TABS では、前走の晴眼スキーヤーは HFS 以外に鈴、ストック等も誘導のための音源として使用していた。また、安全のために TABS と KBSC では、視覚障害スキーヤーにヘルメットの着用を義務付けていた。その他、全ての団体で注意喚起を目的に、視覚障害スキーヤーの団体であることが周囲にわかるようなビブスを着用して滑走していた。

3.5 各団体の晴眼スキーヤー募集と育成法

3.5.1 晴眼スキーヤーの募集：　晴眼スキーヤー募集は、会員や過去の参加者、口コミがどの団体でも中心だった。ポスター掲示やチラシ配布、HP や SNS 利用は 3 団体が実施していた。また、DSC では神奈川県スキー協議会の機関紙を活用して晴眼スキーヤー募集を実施している他、TABS と SH では、ツアー会場付近の社会福祉協議会を通

じて地元スキーヤーの協力も得ていた。

3.5.2 晴眼スキーヤーの育成：　スキー誘導を担う晴眼スキーヤー育成は、各団体ともツアー当日に初参加者を対象に雪上研修を実施している。また、TABS や SH はビデオも利用し、往路のバス車内などで研修を行っている。DSC では、神奈川県スキー協議会主催の研修会を利用して、晴眼スキーヤーへの研修を実施している。

3.6 各団体の課題

現在の課題としては、いずれの団体も晴眼スキーヤーの不足と参加者の高齢化を挙げていた。また、WIHS や HFS など共有備品の購入費や、晴眼スキーヤーのリフト代などの補助費、役員・実行委員の活動費等、資金の不足をあげる団体も 3 団体あった。その他に、晴眼スキーヤーのスキー誘導技術向上を上げた団体も 2 団体あった。

4. 考察

各団体の沿革では、スキー誘導法の技術導入に当たって、KBSC や盲学校の協力を仰いたことから、KBSC や盲学校が視覚障害者スキーの普及に大きく貢献してきたことが明らかになった。

スキー誘導法としては、渡辺ら(1995)や佐藤(2010, 2011)が様々な方法を紹介しているが、今回調査対象の 5 団体では、後方前向き誘導法や前方前向き誘導法が中心だった。これは、各団体が一定程度の滑走技術を有する者が集まって活動するという団体の性質によるものと思われる。

現在の課題としては、各団体共通のものとして、晴眼スキーヤーの不足や参加者の高年齢化が明らかになった。視覚障害者スキーにとって、晴眼スキーヤーによる誘導は、マラソンの伴走者やタンデム自転車の同乗者のように、必須であるが、スキー人口の減少、費用負担（交通費や宿泊費等）、拘束時間の長さなどが、晴眼スキーヤーの不足に影響しているものと思われる。各団体ともこれを重要な課題と認識しているものの、効果的な解決策は見いだせていない。今後は、今回明らかになった課題の改善に取り組むとともに、情報交換を継続して視覚障害スキーヤーのスキー環境の充実・発展に繋げていきたい。

謝辞

今回のかながわブラインドスキークラブ設立 30 周年記念事業「ブラインドスキーサミット 2015」の開催に当たり、リコー社会貢献クラブ FreeWill から多額のご寄付をいただいた。また、シー・ハイル、だいすきークラブ、TABS、三ツ星山の会の皆様には、「ブラインドスキーサミット 2015」への参加並びに発表に快くご協力いただいた。この場をお借りして心より感謝申し上げる。

註

1)図 2 のように、晴眼スキーヤーは視覚障害スキーヤーの後方に位置し、視覚障害スキーヤーと同じ方向（進行方向）を向き、音声で誘導する方法。晴眼スキーヤーはゲレンデの状況と視覚障害スキーヤーの動きを絶えずチェックすることが可能で、ある程度以上のスピードで滑る場合には安全で効率的な誘導法といえる。

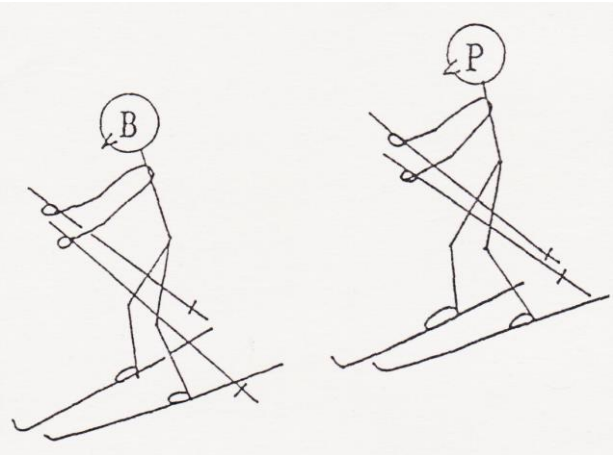

図２　後方前向き誘導法　（渡辺ら、1995）
※図中の「B」は視覚障害スキーヤー、「P」は晴眼スキーヤーを表す。

2)図３のように、晴眼スキーヤーはロービジョンの視覚障害スキーヤーの前方に位置し、視覚障害スキーヤーと同じ方向（進行方向）を向き、視覚障害スキーヤーが晴眼スキーヤーの姿を視覚で確認しながら誘導する方法。晴眼スキーヤーは、時々振り向いて後方を滑る視覚障害スキーヤーを確認しなければならず、視覚障害スキーヤーが遅れたり、転んだりした場合の対応が難しい。そのため、後方にも補助としての晴眼スキーヤーを配置することが望ましい。

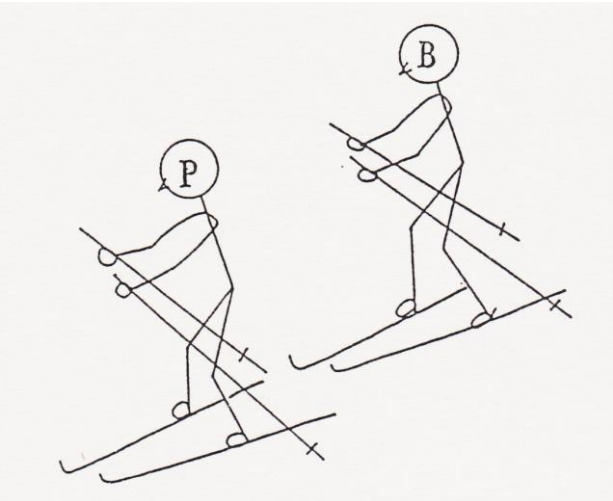

図３　前方前向き誘導法　（渡辺ら、1995）

3)図４のように、晴眼スキーヤーは視覚障害スキーヤーの前方に位置し、視覚障害スキーヤーと同じ方向（進行方向）を向き、音声や鈴などの音で誘導する方法。晴眼スキーヤーは、振り向きながら後方を滑る視覚障害スキーヤーを確認しなければならず、高度の技術を要求されるうえ、視覚障害スキーヤーが遅れたり、転んだりした場合の対応が難しい他、急な斜面や荒れた斜面、混雑したゲレンデなどでは困難な誘導法といえる。そのため、後方にも補助としての晴眼スキーヤーを配置することが必須である。

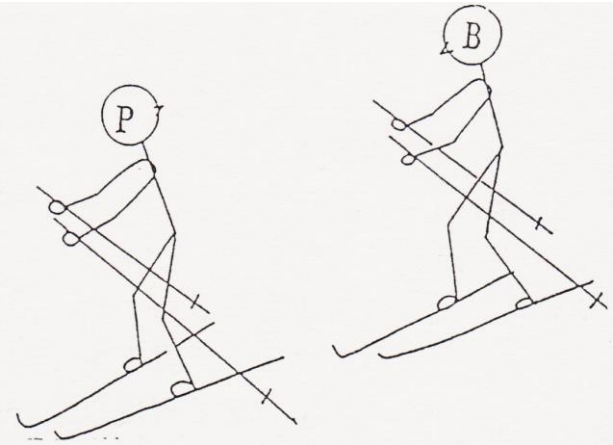

図４　前方後向き誘導法　（渡辺ら、1995）

文献

1) 佐藤紀子(2010) 視覚障害スキーヤーを対象としたスキー指導. 日本大学歯学部紀要, 38, 115-121.

2) 佐藤紀子(2011) 視覚障害スキーヤーに対するスキーガイド方法. 日本大学歯学部紀要, 39, 85-89.

3) 渡辺文治・白崎正彦・増田良一・間嶋和子(1995) 視覚障害スキーヤーのスキー誘導法. *視覚障害リハビリテーション協会紀要*, 2, 16-22.